
俺と天使と...

ヤシロ ユウイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と天使と…

【Nコード】

N6045T

【作者名】

ヤシロ ヌウイ

【あらすじ】

ある日、俺は『死亡フラグ』を立てられて人生が終わるはずだったが、天使によって助けられ、死亡フラグを回避するために、その日をやり直すことになった。そして、俺と天使の協力が始まった。

一回目

この日俺は、死亡フラグを立ててしまったらしい。親切な天使がそう言ったのだから、間違いない。

そして実際に今日、何度死んだか……。本当に数え切れない。

「ところで、本当に俺が死なない終わり方なんてあるのか？」

「ある。確実に。しかしそれは一つだけなのだ。」

と、勝手に人の家上がりこみ、人のゲームをやっている天使がえらそうに言った。

「つーか、その方法を俺に教えてくれればいいんじゃないか？知ってるんだろう、どうせ」

「知っているが、言いたくはない」

「なぜなのでしょう？」

「それは、……今から考える！！」

胸を張ってそういった。この天使は、本当にそういうやつなんですよ。残念ながら。

そういえば、まだ俺と天使の出会いの部分を書いてなかったな。出会いつまり……。最初の死つてことなのですけど。

いつもど通りの朝。俺は身なりを整えて、学校に行く。ちなみに家から歩いて、10分の場所にある。それが志望理由の一番でかい部分でもあった。登校途中にも変わったことは何もない。学校について授業を受けているときもいつもとなんら変わりはない。重要なのは、放課後だ。

そう、放課後にいつもと違ったことが起きた。と、いつても悪いことなどではないのだけど。幼馴染と久しぶりに会った。久しぶりに会ったので、一緒に遊びまわった。気づいたら、もう十時前だった。だから「そろそろ帰るか」そう言った。その後少しよくわから

ない沈黙が流れた。けど、ふつうにまた逢おう、といって分かれたんだけど、その帰りになぜか刺されて死んだ。……らしい。

つぎに目を開けたときに、あいつが、天使が居た。

「あなたは死んだ」

「はい？」

「もう一度言う。あなたは死んだ」

「そうなんですか。じゃあここは天国かどこかですかねー」

「ちがう」

「じゃあ、まさか地獄のほうですか！」

「ちがう」

「じゃあ、ここはどこなんでしょう？」

「そのうち教えるから少し黙って私の話を聞け」

「えっ。は、はい。……でも出来ればどこなのか知りたいな。なんて言ったりして」

「ここは死との境目。以上説明終わり」

「短っ。と言うか説明にぜんぜんなっていないでしょう」

「おまえは、死亡フラグを立てた。だから死んだ」

「死亡フラグ？ それって、ゲームであるヤツのこと？」

「っーか、サラリと言ったが、あなたからお前に呼び方変更になっていますよ！ あえてスルーした、俺は少し大人だからね。

「似たようなものと考えられる」

「じゃあ本当に俺は死んだのか？」

「死んだ」

「それでこの後、天国に行くと思う感じでしょうか？」

「あなたにはチャンスがある」

「チャンスって何の？」

「あなたが生き返るチャンス」

「生き返れるのか？ 本当に？」

「生き返れる。ただし条件付きで」

「条件？」

彼女は、そういつて、うなずいた後歩き出した。

「私は天使」

「天使？でも羽とかないけど？」

「実際には、人間と見た目は変わらない」

「ふーん。そうなのか」

「そう」

「俺は……」

そういつて、自分の名前を告げようとしたとき少し視線が下のほうに言った。

「うわっ。こっこれって」

「あなたがいた町」

俺の下には、少し前まで俺がいた場所だった。学校も、俺の家も見える。ついでに殺された場所も。

「おかしい部分がいくつかある」

突然彼女は、今までとは少し違う表情をしてそういつた。なんとというか、すこし、いやかなり悔しそうな顔をしていた。実際にそんな顔はその時の一回だけだった。

「おかしい部分って。なんだよ」

「この日の死亡フラグは、同じその日に立てられたものであるということだ」

「その日に立てられたってどういう意味だ？」

「つまり、おまえがあの日誰かに恨みを買っようなことして、そいつがおまえを殺したということだ」

「いや、でも知らない奴だったぞ。たぶんだけど」

「知らない奴か。だったら、そっちの奴のほうも調べる必要がありそうだな。まあ、どちらにしる次は大丈夫だろうかな」

「次ってどういうことだよ」

「さっきも言ったとおり、生き返ることが出来るんだよ。あの日」

「いや。お前が言ったのは、生き返るチャンスがあるってことだけ」

だぞ。何だつまりやり直せるのかあの日を？」

「そういうことだ」

「何だ。てつきり生き返りを賭けた戦いでもあるのかと思ったぜ」

「それは実際にあるが、これには調査すべき点があるためこのようになつた」

「そうなのか。じゃあその調査つてのが終わったら？」

「安心しろ。おまえはそのまま生きていられる」

俺のほうを見てそういった後、生き返するための準備があると言つて、どこかに行った。

その後は、いろいろすごかった。生き返るのにあんな物が必要だなんて。というわけで割愛。

目を開けたら、今までどうりの自分の部屋のベッドで寝ていた。

さつきまでことがまるで夢だったかのようなそんな錯覚さえ覚えてしまうほどに、慣れ親しんだ朝の風景だった。

「とりあえずあの日に戻ってきたのか」

「そうやって独り言を言つたつもりだったが、

「とりあえず腹がすいたな。朝飯はまだか？」

なぜか天使もいた。

「何でお前も来ているんだ？しかも、俺の部屋に」

「同じ場所に降りる必要があつただけだ」

天使というより悪魔、そう小悪魔といつてもいいくらいのほほえみを向けてきた。……正直、怖い。

「とりあえずいつもど通りにやっていてくれ。私は少し遊びにいや、大事な調査があるからな！！」

ぐっと、握りこぶしを作ってそういつた。つーか、ここはつつこませてもらうよ。今、遊びについて完全に言つてたから。聞こえてましたから。大体調査なら俺も行ったほうがいいんじゃないのか？と、言おうとしたときに、

「それじゃあ、言ってくる」

と、天使は二階にある俺の部屋の窓を開けて言った。

「おい、ここは二階だぞ。その窓からどうするつもりだ？」

当たり前のような疑問を言った。しかし、少し忘れていたがこいつは天使だったのだ。だから当然のように

「もちろん飛んでいく」

そう言った。そして、天使の羽は、どんな形なのか、マンガやアニメで見るとような真っ白なものなのか、など考えているうちに飛びだしていった。そのままの姿で。

「羽とかいろいろ考えてしまった俺が馬鹿だったよ」

と、いまさら後悔しても遅いので、とりあえずこの日を無事生きて終わらせることを考えよう。そして自分に言い聞かせるように、「とりあえず死亡フラグつてのを立てられないように、過ごせばいいわけだろ？まあ、なんとかなるだろう。いざとなったらどうせ、あいつも助けてくれるだろうしな」

そうして一回目の朝を迎えた。

一回目（後書き）

はじめまして。ヤシロ ユウイです。始め書いた作品ですが、よろしく願います。ありがとうございました。

放課後前

学校に着き、辺りを見回すもちろん変わったことなんか無い。でも、あの日とまったく同じ気がしたので、とりあえず動かないことにした。

そして、何事もなく昼。

「ここまでは、前と変わらない」

なぜか携帯電話という現代の必需品を天使は当たり前のように持っていた。しかも、番号を知られている。

「じゃあ、死亡フラグはいつごろ立てられたんだ？」

「放課後」

ここまでの俺の用心は無駄に終わった。

「放課後ってことは、もしかしてあいつなのか？」

「たぶん、あの幼馴染が関係している」

「あいつが死亡フラグを立てたんじゃないのか？」

「あの人間はどちらかと言うと、好意を抱いていた」

好意ねえ……なんかはずかしいぞ。その言葉。

「じゃあ、もしかしてあいつを好きな奴にいろいろ勘違いとかされて、殺されたとか？」

「まあ、ありえなくはない」

「あいつに会わなかったらいいんじゃないのか？」

「おそろく不可能」

ずいぶんと言い切ってくれたものだな。

「これもフラグのようなもの。いや、出会う運命にあった。今日、出会う」

「そうなのか」

そこまではつきりと言われたそういうしかない。しかし、大事なのは、

「俺はどうすればいいんだ？」

「とりあえず幼馴染に会うまでは、お好きなように」

「は？」

それって……つまり？

「ここまでは、なんだったんだ」

「とりあえず、前とは違うような接し方を心がけるように」

あっさりとするーされる俺の話。

「まあ、わかったよ。あいつとの接し方を変えればいいんだろ？」

「じゃあ、そんな感じで」

そこまで言って電話が切れた……

とりあえず放課後までは適当に過ごしてもいいんだよな？まあ、重要なのはどうやら俺の幼馴染、久しぶりに会う幼馴染であるあいつに対する接し方が問題らしい。その接し方ってやつを考えてますか。とりあえず、放課後まではそうしていよう。

そして、放課後が来た。なんだか前より早く終わったような、そんな感じもした。まあ、気のせいなんだろうけど。

放課後……前とまったく同じ場所で俺はあいつに会った。この後のことを少し思い出してしまい、身がすくみそうになったが、すぐに思い直して、

「今回は必ず生きてやる」そう小さくつぶやいた。

俺と幼馴染

学校に着き、辺りを見回すもちろん変わったことなんか無い。でも、あの日とまったく同じ気がしたので、とりあえず動かないことにした。

そして、何事もなく昼。

「ここまでは、前と変わらない」

なぜか携帯電話という現代の必需品を天使は当たり前のように持っていた。しかも、番号を知られている。

「じゃあ、死亡フラグはいつごろ立てられたんだ？」

「放課後」

ここまでの俺の用心は無駄に終わった。

「放課後ってことは、もしかしてあいつなのか？」

「たぶん、あの幼馴染が関係している」

「あいつが死亡フラグを立てたんじゃないのか？」

「あの人間はどちらかと言うと、好意を抱いていた」

好意ねえ……なんかはずかしいぞ。その言葉。

「じゃあ、もしかしてあいつを好きな奴にいろいろ勘違いとかされて、殺されたとか？」

「まあ、ありえなくはない」

「あいつに会わなかったらいいんじゃないのか？」

「おそらく不可能」

ずいぶんと言い切ってくれたものだな。

「これもフラグのようなもの。いや、出会う運命にあった。今日、出会う」

「じゃあ、前とは何かちがう対応をしなきゃな。どうすればいいんだ？」

「それは、自分で考えなさい」

いきなり、きつく離されてしまった。手伝ってくれるんじゃないか

ったのか。どっちにしろ、死亡フラグを立てられないようにするしかないか。

……それをどうすればいいんだと、そういう問題だと思うんだけど。とにかくあたって砕けるぐらいで行くか。本当に砕けたらまずいけれども。

「おーい」

そうだ、この場所であいつに再会したんだ。俺の幼馴染で、俺の死亡フラグに関係している幼馴染に。

「ひさしぶりじゃないかい」

相変わらずの、良くわからない口調での再開だった。俺にしてみれば二回目の。

「おう。ひさしぶりだな。芽衣」

これが俺の幼馴染の九条芽衣。背は低く、まるで小動物のような人懐っこさの変な口調の女の子。

「お前も帰りか？」

「まあね。部活もやってないしね」

そう言った後すぐに、

「やりなおしで」

「は？」

「さっきのやつ」

「さっきのって。部活か？」

「そう。さあ、何部か聞いて」

「わかったよ。」

こうなると面倒だから簡単に応じる。まあ、どうせくだらないことでも思いついたんだろう。

「何部なんだ？」

「もちろん、帰宅部だよ。しかもエース」

「へえ。すごいですねー」

「褒め称えるがいいよ」

面倒くさいので、適当に寝ておいた。しかも、えらく満足そんな、顔をして先に歩いていった。

「まったく。このあとどうするかな」

前は、芽衣のペースのままだったから今回は、俺が主導権を握るやり方で言ってみるか。まあ、とりあえずやってみるか。

「さっきからなーにぶつぶつ言っちゃってるのさ」

「どうしようかと思ってね」

「なんのこと？」

「これからのこと」

「こっこれからって。まだ、そんなのはやいよ。私たち久しぶりに会っただけじゃない」

「いったい何の話をしているんだ!？」

「これからの私たちの将来の話!！」

いや、そんな力強く言われても。

「うん。でも、私嫌じゃないよ」

目をすごいウルウルさせて、上目遣いって。

「皆川芽衣。いい感じじゃない」

なんかすごい怖い。まあ、もちろん皆川って言うのは、俺のことなんだけど。

「とりあえず。この後どこに行きますかって話なんだけど」

「うん。じゃあ、とりあえず適当なところで語り合おうか!！」

なんか、前と同じような気がしてきた。

俺と幼馴染2

すごかった。とにかくすごかった、それしか言えない位の一人しやべりだった。しかも、途中から自分の人生とか、語りだしてしまつた。熱く一人で語って満足の様子の芽衣は、次はどこに行こうかと歩き回っている。もう、暗くなった街で。

「なんで、二時間も話し続けられるんだ？」

「簡単に私の人生というものを、語ることなんて出来やしないんだよ」

そう胸を張っていった。言っておくけれども、張ってもたいした大きさではない。

「じゃあ、次はキミのターンだぜい」

「はあ？俺にも自分の人生を語れと？」

「もちのろんだぜい」

なんだ。それは。とりあえず俺からは、

「俺とお前は幼馴染だから、人生全部語る必要なんてないだろ？半分くらいは一緒に過ごしたんだから」

「そして、これからもいつしよに過ごそうぜと続くんだよね。もちろん！！」

「なんでだよ！！もちろんって、久しぶりだって言ったのはそっちからだぞ」

「今までさびしい思いさせてごめん。でも、これからはずっと一緒にだぜ。ってことですよ。もちろん」

「もちろんじゃねえよ。全然ちがうからな！」

「まったくもう、ツンデレってやつだね」

もう、反論と云うか突っ込むのが面倒くさくなってきた。だから、ちがう反応で返してみる。

「べ、別にそういうわけじゃないんだからね」

ツンデレで返してみた。言っておくけれども本当にツンデレなわ

けじゃないので。

「ななな、なにいつてるんだいよ。いきなりよう」

めちやくちゃ動揺していた。効果観面だった。なんか顔が赤くなったり、もじもじしたりしているけれど、基本的に芽衣の行動や発言はよくわからないしまったく読めないのでスルー。とりあえず、語ったりするのはこれぐらいにしておこう。

「じゃあ、語りは終わりで。一人語りは終わりで」

かなり重要なことなので、二回言いました。まだ、言い足りないくらいではあるけれども。

「ほう、何か予定でもあつたりするのかい？」

「予定なんてそんなの別に何もないけどな」

まあ、やらなくちゃいけないことならあるんだけど。

「とりあえず、歩くか」

「私と一緒に歩く予定だったと？」

「まあ、そうだな」別に間違ったことじゃないのが、すごい。

「せっかく、久しぶりなんだし今日は遊び倒すか」

「いいね。遊びまくっちゃいますか」

やっぱり、こういう事には、ノリがいいな。まあ、それでこそって感じだな。

「それじゃあ、いきなりはどこに行こうかい？」

「ああ、そ、そうだな」

やばい、自分から提案しておきながらまったく考えていなかった。っていうか、こう言うときにこそその天使じゃあないのか？何をしているんだ？あの人は、いや、人じゃないのか。

と、後半どうでもいいことを考えていた所為で、また、芽衣が前を進んでいる形になってしまった。

「なにしているのさ」

「いや、別になんでもないけど」

「とつとつ、遊び倒しに行こうぜい」

「わかったよ。じゃあ、あっちの……」

「却下」

「速っ」

「つまらないことを言わせるんじゃないよ。ふっ」

「なんなんだ。そのキャラは？」

明らかに失敗だろ。っていうか、なにげにあの却下がショックだった。

「何もないのかね？チミ」

「また、キャラがおかしくなってるぞ」

「あつ。そっか、もしかしてツンデレとか期待してた？」

「違うから！！」

「強く否定するところがまた怪しい」

「じゃあ、どう否定すればいいんだよ」

「簡単なことだよ。めっちゃくちゃ期待してた、って目を輝かせながら言えばいいんだよ」

「否定じゃなくなっている！？」

つまり、受け入れるしか選択肢は最初からなかったと言うことなのか？

「まあ、その輝きに免じて許してあげるけどね」

よくわからないけれど。許された。って言うか輝いているのか…

…。

「話が変わりすぎだろ。どこに行くかって話だろ」

自分でも、忘れそうではあったけど。

「じゃあ、行きたいところがある」

珍しく芽衣が、普通のテンションで、普通の口調で言ってきた。

何か前とは違う展開に期待を抱きつつあった。

俺と幼馴染3回目

結局その、行きたい場所に行き着くまでにはそれなりの時間になつてしまった。なぜかと言うと、芽衣がこんな事を言ったからだ。

「さあ、推理したまえ」

「推理つて？どこに行くかをつてことか？」

「モチのロンですよ」

さむい。じゃなくつて、

「あのまじめモードは、どこに行つたんだ?!」

「最初からまじめちゃんですけど何か？」

まじめなときなんか無いだろ、最初からさつきまで。初めて会つたのはいつだったのか？そんなことも覚えていないくらいに昔のことだ。その俺が断言して言える、芽衣がまじめなときなんて数えるくらいしかない。

「何を考えているんだい？」

芽衣が不意に顔を覗き込んでくる。

「まあ、わかるんだけどね」

「俺が何を考えているのかを？」

「うん。もちろんだよ」

さっきのやつが失敗だと気づいて普通に言ってきた。

「私で、想像してたんでしょ？」

「想像つて何をだよ？」

「えっ。そ、それは、えっちいことを……」

「してるか!!そんなこと!!」

大声で否定。想像と言うか、考えていたというのはあっていたりする。

「それで、どこに行くんだ？」

「いや、推理してくださいよ」

「ギブアップ」

「速い。速すぎるよ、いくらなんでも」

「じゃあ、どうすればいいんだ」

「だから、答えればいいんだよ」

「だから、ギブアップと答えただろ」

「……」

冷たい視線が突き刺さってくる。

「じゃあ、とりあえず。そのコンビニ」

と、ちよつと目の前に見えたコンビニを指差していった。

「私たちの行く場所がコンビニだと推理したわけですね？」

なんか冷たい。

「いや、ちよつと俺がコンビニに行こうかと思って」

「ふーん。」

「す、すぐに済むから」

後ろで何か言っていたが、無視をして走ってコンビニに入った。

そのタイミングで、電話が来た。……天使から。

「もしもし」

「わかったことがある」

「わかったことってもしかして、何で死亡フラグが立てられたのか

ってことか？」

「残念。違います」

「じゃあ、さようなら」

「今回のことには、天使が関係している」

「天使ってお前だろ？」

「違う天使」

天使にも名前ぐらいあるよなそれは。この天使の名前はもちろん

知らないけれど。

「で、その天使を探せばいいのか？」

「とりあえず、報告しておきたいことがある」

「なんだ？」

急に真剣な雰囲気になって……。

「今回もとりあえず、死んじやうからよろしくね。てへっ」
めちやくちやぶりっ子な声で言ってきた。

「何とかできないんですか」

イラッとしたのを抑えつつ言った。

「無理。今回は」

「とりあえず、そのもう一人いるって言う天使を何とかして探し出せばいいんだな?……次は」

「まあ、絶対関係あるとは言い切れないけれど」

「じゃあ、どうするんだよ」

「知らない」

もう、いいや。何言っても無駄になりそうだし。

とりあえず、今言えることは。どうやら今回も前と同じ結末になりそうだと言うことだ。

もう一人の天使

結局また同じ結末になってしまった。最後に天使が言っていたことが本当なら、もう一人天使がいてその所為で俺に死亡フラグが立てられている。と、言うことになる。

「で。もう一人の天使は？」

「どこに居るのかまでは分からない」

「でも、その天使の所為でこうやって繰り返さなきゃいけないんだろ？」

念のため確認をしてみる。

「そう、その天使を探し出せば何か分かるかもしれない」

「手がかりくらいはないのか？」

「近くに居れば分かるはず」

「じゃあ、今までの場所には居なかったのか」

「だから、これからはあなたとずっといっしょだからねっ！！」

「久しぶりだなそれ！？」

「制服とか来ちゃったりして……」

「見た目なら何とかなるが、いまさら転校とか無理だろ」

「それなら、昔から居たことにすればいいだけ」

「そんなことができるのかよ」

「少しぐらいの間だけ」

「じゃあ次はその作戦で行くか」

「その前にやりたいことがある」

「なんだ？」

「ちょっと狩りに行ってくる」

手に持っていたゲーム機を見せてそう言ってきた。

「天使は本当にゲームが好きなんですね」

「もちろんだ。24時間やっていてもたりないくらいに」

こっちの怒りが伝わっていないのだろうか？

「とりあえず、もう一人いるって言う天使を探しに行くぞ」
「こんな朝早くから？」
「学校中を探してダメだったら外に出る」
「まあ、それでいきますか。とりあえず」
やる気のあまり見られない天使を引き連れていつもの道を歩く。
もちろん天使は制服だ。
「もう一人の天使はお前みたいなのヤツなのか？」
「わからない」
「じゃあ、何か分かることは？」
「なにも無い」
「適当に歩き回っていれば見つかるようなものなのか？」
「実は心当たりがある」
「それを早く言えよ！！」
「ただそうなると少し面倒だから、可能性の少しある学校に行っておこうと思った」
いろいろ考えてはいるんだな。一応。
「で、どういう設定になってるんだ？俺たちは」
「愛人関係」
「おかしいだろ。いろいろおかしいだろ！！」
「普通に兄弟」
「最初からそう言えよ」
「とりあえず学校にいるかを確かめて……」
「あー」
「何だいきなり奇声をあげて」
「ここには居ない」
「な。そんな簡単に分かるのか」
「ごめんね。てへっ」
「じゃあ、とりあえず居そうな場所に、っとそういえば心当たりがあるんだろ。そこに行こう」
「わかった。でも、今狩りの途中だから」

家の中だけでなく、外に出て歩きながらゲームをこの天使はしていた。怒らなかつた俺つて、大人になつたな、と少し思った。

「で、そこはどこなんだ？」

「それは」

「それは？」

何でこんなところでもつたいぶるんだ？

「あなたの幼馴染である九条芽衣」

そう言つて俺の前を歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6045t/>

俺と天使と...

2011年9月7日03時28分発行